スポーツにおける原因帰属様式の 因子構造とその特質

伊藤 豊彦 (島根大学教育学部)

(昭和59年12月17日受付)

Factorical structure of attributional styles in sport situations and
its characteristics

Toyohiko Ito¹

Abstract

The purpose of this study was to clarify the factorical structure of attributional styles in sport situations, and to examine the effects of sex, developmental level, sport experience, and attitude toward sport on attributional styles by comparing with factor scores.

A questionnaire designed to measure attributional styles in sport situations was developed and administered to 232 subjects. Principal factor analysis with normal varimax rotation was applied to the two correlation matrices (positive and negative situations) and then the factor scores were compared.

The main results were as follows:

1) In positive situations, 6 factors (interpreted as ability, teacher, effort, luck, difficulty, and opponent) were extracted, and, in negative situations, 6 factors were interpreted as ability, teacher, effort, luck, opponent, and difficulty.

2) It was inferred that in one hand males attributed the positive events to ability, difficulty, and opponent, and the negative events to difficulty, but on the other hand, females attributed the positive and negative events to effort.

3) It was inferred that, in accordance with the advance in age, effort attribution decreased, while ability and opponent attribution increased.

4) It was inferred that the tendency to attribute the positive events to ability and effort, and the negative events to effort increased in accordance with the advance in sport experiences.

5) It was inferred that the subjects who showed unfavorable attitude toward sport tend to attribute the positive events to luck, and the negative events to ability and effort.

These results and their implications were discussed.

(Toyohiko Ito, "Factorical structure of attributional styles in sport situations and its characteristics", *Jap. J. Phys. Educ.*, 30-2: 153-60, September, 1985)

---

1 Faculty of Education, Shimane University, Nishikawatsu, Matsue, Shimane (690)

問 題

自分の行為の原因をどのように認知するかという原因帰属の問題は、その認知がその後の意欲や行動に影響するために、教育的観点からみても重要な問題の一つである。

例えば、学業成績と原因帰属との関連を検討した速水・長谷川⁴⁾は、学業成績の予測に努力帰属が有効であったと報告している。また、樋口⁶⁾は、原因帰属のさせ方の個人差である原因帰属様式(attributional styles)を取り上げ、原因帰属様式→統制感→行動傾向→学業成績という因果モデルを検討し、モデルの妥当性を支持する結果を得ている。つまり、これらの研究は、知能や性格などの要因と並んで、学業成績の規定因をどのように認知しているかという個人的特性としての原因帰属が、学業成績に重要な影響を及ぼすことを示唆している。

そして、最近では、課題遂行に先だって帰属に関する教示を与えるなどの方法で原因帰属を変容させた場合の遂行成績への影響についての研究が行われている^{1), 7), 12), 13), 14), 17), 18), 20)}。これらの研究は、いずれも、原因帰属の遂行成績への影響に焦点を当てており、教育場面における原因帰属への介入の有効性を示唆するものである。また、原因帰属のような個人的要因として比較的上位の問題ならば、教師の具体的指導と結びつきやすいという速水・長谷川⁴⁾の指摘を考慮するならば、学習場面における原因帰属への介入の効果や方略について検討することは、体育やスポーツの指導においても意味あるものと考えられる。

ところで、スポーツ心理学の分野でも、勝敗に対する原因帰属過程を検討するなど、原因帰属理論を応用しようとする試みが行われており^{8), 9), 11), 16)}、原因帰属への介入が運動パフォーマンスの向上に有効なことを示唆する研究もある^{10), 21)}。しかしながら、スポーツ場面における原因帰属への介入の効果的な方略を検討しようとする場合、スポーツ状況に特有な帰属因の検討を含めた原因帰属とその特質について検討する必要があると考える。つまり、原因帰属への介入には、そ

の個人差を考慮する必要があるし、発達的变化や運動・スポーツの実施に好ましい原因帰属を検討することは有効な手がかりを与えると思われるからである。

スポーツ場面に特有な帰属因とその分類を試みたFrieze, et al.²⁾、知的場面と比較して体育やスポーツ場面では能力要因が重視されると報告している速水・長谷川⁴⁾、伊藤⁸⁾、及び西田¹⁶⁾らの研究は、スポーツ場面に特有な原因帰属を示唆するものである。しかしながら、従来のスポーツに関する原因帰属研究は、そのほとんどが勝敗などの状況変数による原因帰属パターンの差異を検討しており、個人的特性としての原因帰属の個人差については明確ではないと考える。

以上のような理由から、本研究では、原因帰属の個人差の観点から、スポーツにおける原因帰属様式を測定する質問紙を作成し、その因子構造を検討することを目的とする。その際、原因帰属様式を測定する事態については、種目によって原因帰属が異なることを示唆する研究¹¹⁾もあり、できるだけ多くの種目について調べることが望ましいが、本研究では、体育学習場面で経験する種目に限定することにする。また、被検者にとって好ましい事態(positive situation：以下正事態とする)と好ましくない事態(negative situation：以下負事態とする)とでは、原因帰属が異なることが予想されるために事態を区別し、独立して測定することとする。

次に、スポーツにおける原因帰属様式をいくつかの因子に分けた上で、主体的条件(性、発達レベル、スポーツ経験及びスポーツに対する態度)による原因帰属様式の差異を因子得点の比較によって行い、その特質を探索的に検討することも目的とする。

方 法

調査対象：中学2年生81名(男子40名、女子41名)、高校2年生93名(男子59名、女子34名)及び大学2年生58名(男子23名、女子35名)の計233名である。

調査期日：1983年12月

調査内容：スポーツ達成領域における原因帰属様式を測定するための質問紙調査を施行した。

質問項目は、スポーツ達成領域に含まれると思われる事態（原因帰属事態）とそれを引き起こすと考えられる原因（帰属因）から成り、自分にそのような原因帰属事態が起ったと仮定し、その帰属因がどの程度自分にあてはまるかを、「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で評定することを求めた。

原因帰属事態としては、体育学習場面で経験する陸上（ハードル走、短距離走、持久走）、球技（バレーボール、バスケットボール、サッカー、ソフトボール）、器械運動（とび箱、鉄棒、マット運動）、水泳、格技（柔道）及びダンスの計13事態を採用した。さらに、各事態について、正、負事態の対を作成したために、計26事態となった。

また、帰属因としては、Weiner, et al.¹⁹⁾の統制の位置と安定性の次元に従い、能力、努力、課題の困難度及び運の4要因を、さらに、学習場面を考慮して先生の要因を採用したために5種類となった。この結果、質問紙の項目数は、13（原因帰属事態）×2（正・負事態）×5（帰属因）の130項目である。

なお、スポーツ場面では、体力、体格、運動能力、あるいは運動神経などが内的で安定的な能力要因と考えられるなど、各帰属因ともに多様な表現が考えられることから、できるだけ様々な表現をとることにした。従って、具体的には以下の形式をとる（カッコ内は負事態を示す）。

1 サッカーでシュートが入った（入らなかった）

① ゴールキーパーが下手だから（上手だから）

② 先生が上手に教えてくれたから（教えてくれなかったから）

③ 運が良かったから（悪かったから）

④ もともと運動能力があるから（ないから）

⑤ がんばって練習したから（しなかったから）

さらに、運動部経験年数とスポーツの好嫌（3段階）に対する回答を求め、それぞれスポーツ経験とスポーツに対する態度の指標とした。

結果と考察

原因帰属様式の因子分析

まず、正事態の評定値（65項目）に対して、主因子法による因子分析を行った。その結果、第6因子と第7因子の固有値の間に落差が見られ、6因子で全体の分散の54.8%が説明できることなどから6因子を抽出し、バリマックス回転を行った。回転後の因子負荷量を表1に示す。

これを見ると、課題の困難度要因が2つに分かれてはいるが、すべて帰属因から各因子を特徴づけることができる。そこで、第1因子は、能力因

表1. 正事態の因子分析結果

項目番号	帰属因	帰属事態	因子番号	因子負荷	項目番号	帰属因	帰属事態	因子番号	因子負荷
1	能力	サッカー	1	.832	32	努力	ハードル走	3	.720
2		ソフトボール		.819	33		短距離走		.679
3		ハードル走		.809	34		ダンス		.665
4		マット運動		.792	35		水泳		.660
5		バスケット		.781	36		バレーボール		.647
6		とび箱		.758	37		持久走		.643
7		水泳		.720	38		ソフトボール		.529
8		短距離走		.709	39		柔道		.495
9		ダンス		.697	40	運	バスケット	4	.723
10		バレーボール		.678	41		ハードル走		.720
11		持久走		.626	42		ダンス		.713
12		鉄棒		.587	43		サッカー		.678
13		柔道		.465	44		マット運動		.650
14	先生	サッカー	2	.817	45		短距離走		.646
15		ソフトボール		.816	46		鉄棒		.626
16		短距離走		.769	47		持久走		.616
17		バスケット		.762	48		ソフトボール		.603
18		鉄棒		.758	49		バレーボール		.496
19		バレーボール		.746	50		水泳		.467
20		ハードル走		.732	51		とび箱		.461
21		持久走		.715	52	課題	とび箱	5	.649
22		とび箱		.696	53		マット運動		.609
23		柔道		.687	54		バスケット		.592
24		ダンス		.683	55		鉄棒		.571
25		マット運動		.663	56		ダンス		.557
26		水泳		.660	57		水泳		.537
27	努力	サッカー	3	.814	58		短距離走	6	.522
28		マット運動		.791	59		柔道		.514
29		とび箱		.774	60		サッカー		.466
30		鉄棒		.746	61		持久走		.464
31		バスケット		.720	62		ソフトボール		.437

注1 因子負荷量が、400未満の項目は、省略した。なお、項目番号は、見やすいように並べかえてある。

注2 例えば、項目1では、サッカー場面の正事態に対する能力帰属の項目である。

表2. 負事態の因子分析結果

項目番号	帰属因	帰属事態	因子番号	因子負荷	項目番号	帰属因	帰属事態	因子番号	因子負荷
1	能力	バレーボール	1	.814	30	努力	水泳	3	.720
2		ソフトボール		.733	31		サッカー		.703
3		バスケット		.727	32		柔道		.693
4		サッカー		.720	33		ソフトボール		.641
5		ハードル走		.667	34		持久走		.607
6		マット運動		.644	35		バスケット		.595
7		ダンス		.587	36		ハードル走		.587
8		短距離走		.582	37		ダンス		.583
9		水泳		.580	38		とび箱		.558
10		とび箱		.577	39		マット運動		.533
11		柔道		.565	40	運	ダンス	4	.680
12		鉄棒		.527	41		短距離走		.639
13		持久走		.521	42		サッカー		.615
14	先生	短距離走	2	.764	43		ソフトボール		.581
15		バスケット		.748	44		水泳		.566
16		バレーボール		.743	45		持久走		.547
17		柔道		.718	46		バスケット		.519
18		サッカー		.711	47		鉄棒		.500
19		持久走		.675	48		マット運動		.402
20		ダンス		.666	49	課題	柔道	5	.595
21		水泳		.666	50		短距離走		.559
22		ソフトボール		.654	51		サッカー		.500
23		鉄棒		.650	52		バレーボール		.469
24		マット運動		.609	53		持久走		.450
25		ハードル走		.606	54		ソフトボール		.445
26		とび箱		.568	55		マット運動		.597
27	努力	鉄棒	3	.808	56		鉄棒	6	.556
28		バレーボール		.746	57		とび箱		.462
29		短距離走		.745	58		水泳		.462

注1 因子負荷量が、400未満の項目は、省略した。なお、項目番号は、見やすいように並べかえてある。

注2 例えば、項目1では、バレーボール場面の負事態に対する能力帰属の項目である。

子、第2因子は教師因子、第3因子は、努力因子、第4因子は、運因子と命名することにする。第5因子は、各種目自体の困難度を、また、第6因子

は、相手の能力や技術レベルを表わす内容を示すと考えられ、それぞれ困難度因子、相手因子と命名することにした。

次に、負事態について同様の因子分析を行った結果、第6固有値と第7固有値との間に落差が見られ、6因子で49.9%の分散が説明できることなどから、6因子を抽出し、バリマックス回転を行った。表2は、回転後の因子負荷量を示したものである。

これを見ると、正事態と同様に、負事態においても課題の困難度要因が2因子に分かれたものの、帰属因の性質から各因子を特徴づけることができる。そこで、第1因子は、能力因子、第2因子、教師因子、第3因子は、努力因子、第4因子は、運因子、第5因子及び第6因子は、正事態と同様の理由から、それぞれ、相手因子、困難度因子と命名することにする。

以上の結果から、本質問紙の項目は、かなりの単純構造を示すことが明らかとなった。また、正、負両事態の因子が、原因帰属事態からではなく、帰属因の性質から命名することができたことから、スポーツ場面における原因帰属様式を測定する手がかりを与えるものと思われる。

なお、課題の困難度要因が困難度因子と相手因子とに分かれたことから、スポーツ場面では、外的で安定的な課題の困難度要因と外的ではあるが不安定な側面を持つ相手の要因とを区別する必要がある。

因子得点からみた原因帰属様式の比較

正・負事態の各6因子に関して、各個人の因子

図1 性別にみた原因帰属様式の因子得点プロフィール (左正事態、右負事態)

○男子 (N=122) ●女子 (N=110)

注) *, **はそれぞれ5%, 1%水準の有意差を示す (t検定)

得点を算出し、性、発達のレベル、スポーツ経験及びスポーツに対する態度の観点から、因子得点を比較検討した。

性差について：男女別に各因子の因子得点を算出し、事態別平均因子得点プロフィールを描いた（図1）。t検定の結果、正事態においては、能力、努力、困難度及び相手因子に有意差が認められた（ $t=3.22$, $t=-2.81$, $t=3.73$, $t=-2.88$ ：いずれも $p<.01$, $df=230$ ）。従って、正事態では、男子は女子よりも能力、困難度及び相手に帰属し、努力帰属は、女子が男子よりも高いと推測される。

一方、負事態では、能力、努力、相手及び困難度因子に有意差が認められた（ $t=-2.78$, $p<.01$ ； $t=-2.30$, $p<.05$ ； $t=3.17$, $p<.01$ ； $t=-2.23$, $p<.05$ ； $df=230$ ）。これらの結果から、女子は男子よりも負事態の原因を能力、努力及び困難度に帰属し、相手への帰属は、男子の方が女子よりも高いと推測される。

以上のように、原因帰属様式の性差が推測されたが、これは、男女による能力評価の差異から説明できよう。即ち、一般的に、男子は女子に比較して運動やスポーツにおける能力評価は高いと考えられ、正事態の原因を能力に帰属し、負事態では、自己評価の低減を意味しない相手帰属を行うのであろう。一方、女子の場合は、能力の自己評価が低いために、正事態の原因を努力に帰属し、負事態では、能力の低さを確認する方向で、能力や困難度に帰属させると考えられる。

また、女子が正、負事態を越えて努力帰属を行うという結果は、樋口ら⁶⁾の研究結果と一致しているが、彼らは、達成場面で志向する動機の性差

から説明している。つまり、男子が能力志向であるのに対して、女子では、他者の承認や賞讃を得たいという社会的承認志向動機が優位である。従って、男子が能力の高さを重視するのに対して、女子の場合では、社会的承認を得やすい努力帰属を行うと考えられるのである。

発達の变化について：原因帰属様式の発達レベルによる差異を検討するために、中学、高校、大学別に平均因子得点プロフィールを描いた（図2）。

一要因分散分析の結果、正事態では、能力（ $F(2,229)=11.35$, $p<.01$ ）、教師（ $F(2,229)=6.34$, $p<.01$ ）、努力（ $F(2,229)=12.93$, $p<.01$ ）及び相手（ $F(2,229)=8.95$, $p<.01$ ）の4因子に有意差が認められ、多重比較検定の結果、能力因子と相手因子では、高校及び大学が中学よりも高く、教師因子の場合、中学が高校及び大学よりも高く、努力因子では、大学及び中学が高校よりも高い因子得点を示した（表3）。

次に、負事態では、教師（ $F(2,229)=3.86$, $p<.05$ ）、努力（ $F(2,229)=7.55$, $p<.01$ ）及び相手（ $F(2,229)=6.74$, $p<.01$ ）の3因子に有意差が認められた。多重比較検定の結果（表3）、教師因子では、高校が中学よりも高く、努力因子では、中学及び大学が高校よりも高く、相手因子の場合、大学及び高校が中学よりも高い因子得点を示した。

以上の結果と図2の帰属パターンから、発達レベルにおける差異をみると、中学生の事態を越えた努力帰属が、高校・大学と年齢の増加に伴って減少し、相対的に能力や困難度帰属が増加してい

図2 校種別にみた原因帰属様式の因子得点プロフィール（左正事態、右負事態）

●中学生（ $N=81$ ） ■高校生（ $N=93$ ） ▲大学生（ $N=58$ ）

注）＊，＊＊はそれぞれ5%，1％水準の有意差を示す（分散分析）

表3. 発達レベル別の多重比較検定結果

正事 態	F 1	大学, 高校>中学
	F 2	中学>高校, 大学
	F 3	大学, 中学>高校
	F 6	大学, 高校>中学
負事 態	F 2	高校>中学
	F 3	中学, 大学>高校
	F 5	大学, 高校>中学

注1 正事 態 F 1 能力, F 2 教師
F 3 努力, F 6 相手
負事 態 F 2 教師, F 3 努力
F 5 困難度

注2 5%水準

くと推測される。これは、自己の努力が結果に反映しない経験を積み重ねるに従い、努力の限界が意識され、結果的に自己の安定した属性である能力や外的要因がより重視されていくためではなかろうか。

本研究結果は、このような自己のイメージが年齢の上昇に伴って固定化していくことを示唆しており、原因帰属への介入の観点からすれば、年齢の上昇に従って、より綿密な方略が必要になると考える。しかしながら、原因帰属の発達について原因スキーマの観点から検討した速水、松田⁵⁾は、小学校6年生にならないと帰属因である能力と努力の概念そのものを区別できないと報告しており、今後、小学生を含めた詳細な検討が必要であろう。

スポーツ経験による差異について：スポーツ経験による原因帰属様式の差異を検討するために、運動部経験年数を4水準（非経験者、3年未満、

6年未満、6年以上）に分け、平均因子得点プロフィールを描いた（図3）。

一要因分散分析の結果、正事 態では、能力因子($F(3,228)=6.21, p<.01$)と運因子($F(3,228)=2.98, p<.05$)に有意差が認められた。多重比較検定の結果(表4)、能力の場合、6年未満の経験者が3年未満及び非経験者よりも高く、運因子では、非経験者が6年以上の経験者よりも高い得点を示した。一方、負事 態では、能力因子にのみ有意差が認められた($F(3,228)=7.90, p<.01$)。多重比較検定の結果(表4)、非経験者が6年未満及び6年以上の経験者よりも高く、3年未満の経験者は6年以上の経験者よりも高い得点を示した。

以上の結果から、スポーツ経験の増加に伴って、正事 態の原因を能力に帰属する傾向が増加し、負事 態では、逆に能力帰属が減少していくと推測される。また、帰属バランスを見ると(図3)、経験年数の増加につれて正負事 態ともに努力帰属が増加していくと推測される。

これらの原因帰属様式の差異は、経験年数の増加に従って因子得点に変化していることから、個人の原因帰属様式とスポーツ経験の相互作用によ

表4. スポーツ経験別の多重比較検定結果

正事 態	F1	6年以上, 6年未満, >3年未満, 経験なし
	F4	経験なし>6年以上
負事 態	F1	経験なし>6年未満>6年以上; 3年未満>6年以上

注1 正事 態 F1 能力, F4 運; 負事 態 F1 能力

注2 5%水準

図3 運動部経験別にみた原因帰属様式の因子得点プロフィール（左正事 態，右負事 態）

●経験なし (N=57) ○0～3年 (N=83) □3～6年 (N=66) ■6年以上 (N=26)

注) *, **はそれぞれ5%, 1%水準の有意差を示す(分散分析)

図4 スポーツに対する好嫌別にみた原因帰属様式の因子得点プロフィール（左正事態、右負事態）

●好き群 (N=171) □ふつう群 (N=44) ■嫌い群 (N=17)

注) ※, ※※はそれぞれ5%, 1%水準の有意差を示す(分散分析)

表5. スポーツの好嫌別の多重比較検定結果

正 事 態	F1	好き群>ふつう群, 嫌い群
	F3	好き群>嫌い群, ふつう群
	F4	嫌い群>好き群
負 事 態	F1	嫌い群>ふつう群>好き群
	F3	好き群>ふつう群

注1 正事態 F1 能力, F3 努力, F4 運
負事態 F1 能力, F3 努力

注2 5%水準

るものと解釈される。従って、スポーツの継続した実施には、自己の能力に対する自信と努力によって結果を統制できるという認知が重要であると考えられ、体育やスポーツにおける原因帰属への介入に有効な手がかりを与えられると思われる。

スポーツに対する態度による差異について：スポーツに対する態度による差異を検討するために、スポーツに対する好嫌度を3水準（好き、ふつう、嫌い）に分け、平均因子得点プロフィールを描いた（図4）。

一要因分散分析の結果、正事態では、能力（ $F(2,229)=4.45, p<.05$ ）、努力（ $F(2,229)=4.02, p<.05$ ）及び運（ $F(2,229)=3.18, p<.05$ ）の3因子に有意差が認められた。多重比較検定の結果（表5）、能力因子と努力因子では、好き群がふつう群及び嫌い群よりも高く、運因子では、嫌い群が好き群よりも高い因子得点を示した。一方、負事態では、能力因子（ $F(2,229)=19.84, p<.01$ ）と努力因子（ $F(2,229)=4.31, p<.05$ ）とに有意差が認められ、多重比較検定の結果（表5）、能力因子では嫌い群がふつう群よりふつう群は好き群

よりも高い得点を示し、努力因子では、好き群がふつう群よりも高い得点を示した。

以上の結果と図4の帰属パターンから、スポーツに対して非好意的態度を示す者は、正事態の原因を運に帰属し、負事態の原因を能力に帰属すると推測される。

本研究結果は、また、「運動が嫌い」の主たる原因を自己の能力の劣等感と指摘する波多野・中村³⁾の報告を原因帰属の観点から支持するものである。つまり、本研究における嫌い群の原因帰属様式は、成功してもその原因を運に帰属させるために自信や意欲は高まらず、失敗の原因を自己の能力不足に帰属するために、動機づけは抑制される傾向を示すと考えられるからである。さらに、嫌い群が自己の努力を結果に影響しないものと認知する傾向は、学習された無力感からの研究知見とも一致するものである。

ま と め

本研究の目的は、スポーツにおける原因帰属様式の因子構造を明らかにし、さらに、主体的条件（性、発達レベル、スポーツ、経験、スポーツに対する態度）による原因帰属様式の差異を因子得点の比較によって行い、その特質を明らかにすることである。

正、負事態別の因子分析の結果、それぞれ6因子が抽出された。これらの因子は、すべて帰属因の性質から命名できるものであり、本質問紙の項目がかなりの単純構造を示すことが示唆された。また、主体的条件による原因帰属様式の比較検討

結果から、本質問紙がスポーツにおける原因帰属様式を測定可能であることが示唆されたと思われる。従って、今後さらに項目を精選し、妥当性の高い尺度を決定していくことが必要であろう。

さらに、原因帰属様式の主体的条件による比較検討結果は、スポーツにおける原因帰属様式が体育やスポーツの具体的問題と密接に関連していることを示唆しており、原因帰属への介入や学習指導に対して有効な手がかりが与えられたと思われる。

なお、本研究のデータ解析は、島根大学計算機センターを経由し、京都大学大型計算機センターのSPSS プログラム¹⁵⁾によって行われた。

引用・参考文献

- 1) Dweck, C.S., "The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness," *J. Pers. Soc. Psychol.*, 31-4: 674-85, 1975.
- 2) Freize, I.H., McHugh, M.C. and Duquin, M.E., "Causal attributions for women and men and sports participation," paper presented at the Annual Meeting of the American Psychological Association, Washington, D.C., 1976.
- 3) 波多野義郎・中村精男「『運動ざらい』の生成機序に関する事例研究」*体育学研究*, 26-3: 177-88, 1981.
- 4) 速水敏彦・長谷川孝「学業成績の因果帰着」*教育心理学研究*, 27-3: 197-205, 1979.
- 5) 速水敏彦・松田敦子「原因シユマの発達一学業成績の能力および努力帰属に関して一」*教育心理学研究*, 30-3: 165-74, 1982.
- 6) 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作「児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討」*教育心理学研究*, 31-1: 18-27, 1983.
- 7) 広瀬幸雄・石井 徹・木村昌幸・北田 隆「達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果—Weinerのモデルの実験的検討—」*実験社会心理学研究*, 22-1: 27-36, 1982.
- 8) 伊藤豊彦「運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究」*体育学研究*, 25-2: 105-11, 1980.
- 9) 伊藤豊彦「勝敗の原因帰属に関する研究」*スポーツ心理学研究*, 9-1: 21-25, 1982.
- 10) 伊藤豊彦「帰属教示が運動パフォーマンスに及ぼす影響について」*体育学研究*, 24-4: 299-308, 1984.
- 11) 伊藤豊彦・島田正大「スポーツに対する原因帰属に関する研究」*島根大学教育学部紀要(教育科学)*, 16: 43-48, 1982.
- 12) 金子智栄子「努力帰属が概念学習課題と単純作業課題の逆行水準に及ぼす影響について」*教育心理学研究*, 30-3: 244-49, 1982.
- 13) Kukla, A., "Atributional determinants of achievement-related behavior," *J. Pers. Soc. Psychol.*, 21-2: 166-74, 1972.
- 14) 松本真作「原因帰属の操作と成功の主観的確率について」*日本心理学会44回発表論文集*, 712, 1979.
- 15) 三宅一郎・中野嘉弘・水野欽司・山本嘉一郎, SPSS 統計パッケージ II 解析編, 東洋経済新報社, 1977, pp. 129-55.
- 16) 西田 保「スポーツにおける勝敗の原因帰属に関する研究」*総合保健体育科学*, 4-1: 83-90, 1980.
- 17) 大西はるみ「加算作業に及ぼす帰属に関する教示および達成動機の影響」*教育心理学研究*, 31-1: 44-48, 1983.
- 18) Tachibana, Y., "Causal attribution control, level of need achievement and task outcome," *Psychologia*, 21: 39-48, 1978.
- 19) Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S. and Rosenbaum, R.M., "Perceiving the causes of success and failure," In Jones, E.E. (Ed.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*, General Learning Press, 1972, pp. 95-120.
- 20) Weiner, B. and Sierad, J., "Missattribution for failure and the enhancement of achievement strivings," *J. Pers. Soc. Psychol.*, 31-3: 415-21, 1975.
- 21) Yukelson, D., Weinberg, R.S., West, S. and Jackson, A., "Attribution and performance: An empirical test of Kukla's theory", *Journal of Sport Psychology*, 3-1: 46-57, 1981.